

只見警女夜話(最終回)

警女からのヒント

水上勉の作品に『はなれ警女 おりん』という小説があります。警女は男性と交わると、おきて破りの罰を受け組織から追放され、何の保証もない乞食警女になります。それをはなれ警女と言いました。そうなると大概は男にだまされて売り飛ばされるか、行き倒れるかというさらに悲しい末路が待っていたのです。同じく『越後つづいし親不知』という小説がありますが、これとはなれ警女が産んだ娘の悲しいお話です。

昨冬、警女の記録映画を永年にわたって撮り続けてきて、そのDVDを発売した伊東喜雄監督から話を聞きました。

門付け旅と一緒にいって行ったら、門付け先の家人が心付けのお米を持っていて、警女に「何人だ」と聞いたそうです。三人なのにどうして人数を聞くのかと不思議に思ったら、家で病氣

で寝ている老警女の分、留守番の子ども警女の分をも含めて何人いるのかという意味で尋ねたとのこと。五人と答えると、「そうか五人分なあ」と言つて、小皿で五杯分をすくつて袋のなかに入れてくれたそうです。「あのときは感動して心が熱くなったなあ。これこそ正に福祉の原点だな」と涙が流れたそうです。実によい話ですね。ずっと人間以下の扱いをされ続けてきた彼女たちにもそうした待遇を受けたいこともあったのです。

さて、今月号で警女の話も最後になってしまいました。私は彼女たちのことをいろいろ調べてきて、それを単なる思い出話にするつもりはないのです。現代人との兼ね合いにおいて、警女たちの存在をあまり消えさせないで、生きがいが現代に生きる我々にどういう波紋を投げかけるのかを問うてみたいのです。そこにこそ警女を知ることの意味があるのです。

先年、小林多喜二の小説『蟹工船』が若者の共感を呼び、爆

発的に読まれたそうですが、そのことはいつたい何を物語っているのでしょうか。浮かれた時代が去り、夢の持てない、報われることの少ないワーキングプア、就職難民、そしてストレスのかけ場を失って徐々に心を病んでいく人々。そんな時代のうめきの一現象ではないのでしょうか。

然が一度牙をむけば、一瞬のうちにはすべてが藻くずのごとく消えてしまふはかない存在なのです。そう考えれば、我々は一人ひとりみんな警女と同じ人生という、か細い道を歩いている存在だと思に至るのです。そして何より、彼女たちのようにたくましく生き抜かねばなりません。警女は消えましたが、ストイックな彼女たちの精神やそれを支え続けた日本人の心はしっかりと現代人に引き継がれていくべきだと強く思うのです。

囲で一生懸命に生きました。しかも身につけた芸には誇りを持っていました。こうしたたくましい生きざまは、今を生きる我々に大きなヒントになりはしないかと。将来だ、安定だと後生大事に叫んでみても、天変地異で大自



夏の門付け(渡部等・絵)